



クスノキの人工林

## 日本の化学産業を支えた クスノキの人工林

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林樹芸研究所

齋藤暖生

### 樹芸研究所と クスノキの人工林

樹芸研究所は東京大学の演習林の一つで、伊豆半島の南端の静岡県南伊豆町にあります。ここに約48haにもおよぶ、まとまった面積のクスノキの人工林があり、「東京大学樹芸研究所 岩樟園クスノキ林」として林業遺産に認定されています。

このクスノキの人工林は、渡辺平四郎という人物によって、樟脳生産を目的として植栽されました。渡辺は、現在の松崎町岩科(旧・岩科村)の出身で、岩科村の村長を務めたほか、「伊豆の鉱山王」の異名を持つ実業家でした。明治41(1908)年、渡辺は現在の南伊豆町青野の奥山に原野を購入し、人夫を住ませ、クスノキの植栽と樟脳生産に着手しました。渡辺は、この山林を岩科村の「岩、クスノキの漢字「樟」とって、「岩樟園」と名付けました(松崎町2001)。

植林をして間もない明治42(1909)年、大雨による土砂崩れをきっかけに、金

銅鉱が見つかりました。そこで、渡辺は鉱山経営に乗り出しました。この鉱山では、多くの労働者と牛馬が働いたとされています(松崎町2001)。樹芸研究所に伝わると、1910年代に撮影されたとされる岩樟園の写真を見ると、若い植林地を背景に、二つの石塔が見えます。この石塔は、鉱夫一同によって大正2(1913)年に設置されたものです。

鉱山の経営は順調であったようですが、大正3(1914)年に大手の鉱山会社に譲渡されます。さらにその後、岩樟園を含む周辺の山林は東京帝国大学によって購入され、昭和18(1943)年に樹芸研究所が設



渡辺平四郎の肖像(国指定重要文化財岩科科学校蔵)

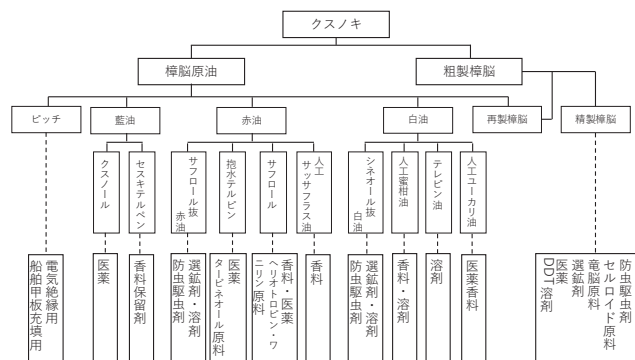
立されました。岩樟園のクスノキ林は、大  
学演習林として引き継がれることになった  
のです。



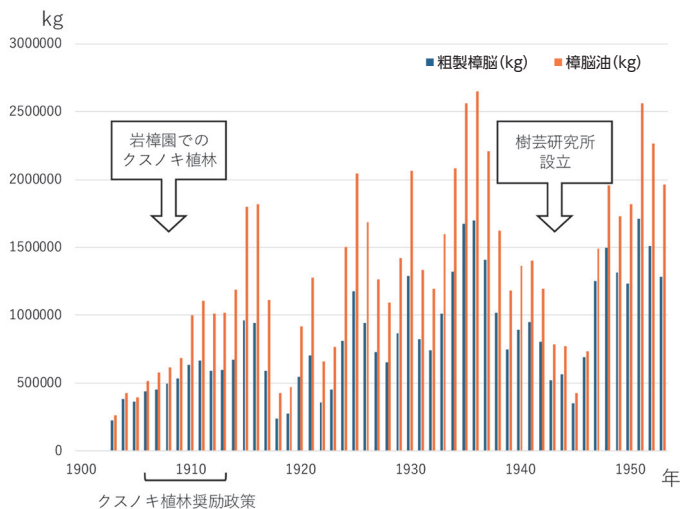
1910年代に撮影されたとされる岩樟園(樹芸研究所蔵)

## クスノキと樟脳生産

渡辺がそうだったように、クスノキは樟  
脳の原料として期待されていきました。クス  
ノキの木片や枝葉を蒸留すると、樟脳と樟  
脳原油が得られ、これらをさらに精製・加  
工することで、医薬品、香料、セルロイド  
等が得られました。セルロイドは合成樹脂  
で、かつては文房具やおもちゃ、カメラの  
フィルム等、暮らしの中で広く使われてい  
ました。樟脳は化学工業の原材料として、  
明治時代から日本の重要な輸出品でもあ  
りました。



クスノキ由来の多様な化学製品とその用途(『樟脳読本』をもとに作成)



日本における樟脳の生産量の推移(『樟脳専売史』より作成)

岩樟園での樟脳生産の実態は不明です。

## クスノキ人工林のいま

樟脳の含有量は、若い木よりも古い木  
で、さらに根株付近において高いとされて  
います。したがって、樟脳の生産が盛んに  
なれば、樹齢を経たクスノキが根際から伐  
採されるようになります。政府はクスノキ  
原木の欠乏を問題視し、明治39(1906)  
年〜大正2(1913)年にクスノキ植林を  
奨励する政策を行いました(日本専売公社  
1956)。まさに、こうした時代に植えら  
れたのが、岩樟園のクスノキなのです。

前述のように鉾山経営の方に経営努力が注  
がれ、植栽したクスノキが生産に適する樹  
齢に達する前に大学演習林になったと考え  
ると、本格的なクスノキの伐採は行われな  
かったと思われます。

2025年現在、岩樟園のクスノキの樹  
齢は、120年に迫ろうとしています。胸  
高直径が1mに迫る大木も散見され、林冠  
を高く覆う様子は壮観です。春には新しい  
芽吹きが斜面を赤らめます。これだけの面  
積のクスノキの林は珍しいばかりでなく、  
化学産業を背景に成立した森林・林業の姿  
を伝えるものとして貴重です。

引用文献  
専売文化事業協会(1950)樟脳読本、日  
本専売公社  
日本専売公社(1956)樟脳専売史、日本  
専売公社  
松崎町(2001)郷土の先覚者たち、松崎  
町



展葉期のクスノキの人工林



クスノキの樹冠